

もじくみ仮名

日本語の文字と組版を考える会

2001
0815

――ご挨拶に代えて――

今回、日本語の文字と組版を考える会はデジタルフォント特太明朝体仮名書体Ⅱ「もじくみ仮名」を無料で提供することになりました。

この「もじくみ仮名」は再配布に関しても、あらゆる制限をもうけませんので、どうか自由に活用してください。

日本語の文字と組版を考える会は、一九九六年二月一二日に第一回のセミナー、『ページネーション・マニユアル』の提起・鈴木一誌』から始めました。

以降、二カ月に一回のセミナー開催を中心に活動、一九九九年二月五日の第一七回セミナー『組版が立ち現れるまでに』明解日本語文字組版再構築』まで、三年間にわたって活動を続けました（詳しくはウェブサイトをみてください）。

第一回から第一二回までは印刷媒体で会報を発行していました。活動の記録をA四判一六ページ前後の冊子にして、参加者約二〇〇人に郵送していたのです。

二〇〇〇円の会場費（二〇〇人の参加でも四〇万円）では、会場費、機材の借り上げ費から、チラシ、講師謝礼、当日の資料代、会報の印刷費・郵送費までをまかないきれなかったため、第一三回セミナーから最終セミナーとなった第一七回までは、会報をウェブサイトで掲載することにしました。

その結果、赤字が解消されて黒字になっただけでなく、第一七回セミナーを終え残務処理を終わらせてみると、逆に約一二〇万円を残すことになったのです。

そこで、約一年の活動停止期間をはさんだ後、昨二〇〇〇年一二月、残した運営費、約一二〇万円の使い途を決めました。

会として仮名書体をつくって、無償で配布する事でした。

さて、具体的には仮名書体制作の方針は次のようなものでした。

◎予算は会の運営費の残額、約一二〇万円をすべて充てる

◎約一二〇万円という予算上の都合で、仮名だけを制作する

◎会のウェブサイトで、誰でも無料でダウンロード出来るようにする。また、再配布、加工に関しても制限を設けない

◎見出しに使うための明朝体漢字に合わせる仮名書体とする。実際の使い方は、イラストレータでアウトライン化して使うことが多いと思われるため（タイトルだけならアウトライン化しても大きな「負担」にならないと思われるから）

◎書体の制作には、実際の原字制作から、デジタル化などを含めた実働部隊の総合ディレクションを小宮山博史さんにお願います

というものでした。

このことを小宮山さんに依頼したところ快く引き受けていただきました。

同時に打ち合わせた具体的な制作の方針は、小宮山さん自身に書いていただいた通りです。

さて、最後にスタッフを紹介させていただきます。

実際の制作作業をしてもらったスタッフに心から感謝します。

原字製作設計…小宮山博史

ハンドデジタルタイズ…下里晃弘

デジタルフォーマット…高野幸子

こうして出来上がった特太明朝体仮名書体「もじくみ仮名」です。

みなさんに積極的に活用してもらえれば嬉しいです。

（文責・沢辺均）

二〇〇一年八月

日本語の文字と組版を考える会・世話人一同

太田温乃、杏橋達磨、逆井克己

沢辺 均、高野幸子、萩野生政

もじくみ仮名書体について

小宮山博史

こみやま・ひろし 佐藤タイポグラフィ研究所代表。印刷史研究会代表。佐藤敬之輔に師事、書体デザインと活字書体史、文字デザイン教育を柱として活動。書体デザインは平成明朝体、チベットの語書体、中華民国国立科学自然博物館ディスプレイ用特明朝体他など多数。活字書体史の研究の成果は『明朝体活字字形一覽——1820年〜1946年——』（文化庁文化部国語課、一九九九年）、『本と活字の歴史事典』（柏書房、二〇〇〇年）などに見られる。現在一八〇〇年代から一九六〇年までの日本を含む世界で作られた仮名書体のほとんどを収録した書体集成と解説を制作中。文字デザイン教育では、武蔵野美術大学通信教育部のレタリングテキストと指導書を執筆中。また、阿佐ヶ谷美術専門学校のタイポグラフィのテキストとして『タイポグラフィ基礎』（仮題、柏書房より二〇〇二年四月市販予定）を現在制作している。レタリングに関しては日下潤一氏の個展のために『LETTERING』を執筆（二〇〇一年七月、10部限定）。

好むと好まざるとにかかわらず、明朝体は日本語組版の基本書体としての地位を保っています。

明朝体という書体様式は、木版印刷用の書体として中国の明あるいは宋の時代に開発されたものだと思います。中国の木版用書体を、最初に近代活版印刷術にのせたのは開発国の中国ではなく、十九世紀のヨーロッパの東洋学者やキリスト教宣教師たちでした。漢字を活字化するにあたって彼らは中国での正統的書体である楷書を採用せず、それよりもっと形式化された明朝体（この名称が使われたのは明治九年ごろで、それまではただ活字とよんでいたと思います）を使ったのは、彼らの基本書体であるローマン体と似かよった書体様式であったからだと思います。

東洋学や伝道活動の進展にともなう組版に必要な各種サイズの明朝体が次々に開発され、それらは欧米人の中国進出拠点の一つである上海に集積されていきました。上海に集積された明朝体は、明治二年一月美華書館（上海にある北米長老会印刷所の名前です）の館長ウィリアム・ガンプルによって長崎にもたらされ、以降四ヵ月間にわたる印刷および活字製造のための講習が活版伝習所（現在の長崎消防局の前あたり）でおこなわれました。

ウィリアム・ガンプルを長崎に招聘したのはオランダ通詞であ

り、長崎製鉄所（現三菱長崎造船所）頭取もつとめた本木昌造です。本木は「もとぎ」と濁らずに読みならわされていますが、本木家オランダ文書の自筆サインは「Morigi」となっていますので、「もとぎ」と濁るのが正しいと思われます。

四ヵ月にわたる講習は近代活版印刷術と活字の種字（たねじ）製作、それを使った母型（ぼけい）製造および活字鑄造技術の習得であったことが、上海で発行されていた雑誌の中に記録されて残っています。この講習が日本における近代活版印刷術の出发点になりました。

本木昌造は長崎製鉄所内のごたごたもあり、職を辞して活字製造を目的とする新町活版所を設立します。明治三年のことです。この新町活版所が、後に数々の優れた書体を生み出して日本の活字業界をリードしていく東京築地活版製造所の前身です。

「日本語の文字と組版を考える会」が提供するこのもじくみ仮名書体は、東京築地活版製造所が開発した大見出し用の特明朝体である「初号明朝体」（活字の大きさは一四・八ミリ正方）を基にして制作しています。

初号活字は号数制サイズでは最大の大きさの活字です。金属製活字の歴史の中で姿形・品質ともに群を抜くのは、

一、東京築地活版製造所初号活字

二、秀英舎（現大日本印刷株式会社）初号活字

東京築地活版製造所の初号活字の制作年は不明ですが、明治二十年前後には完成していたと思われます。初号明朝体の仮名は、毛筆仮名の名残りを充分にのこしながら正方形の活字表面の中に収めています。現在のわたしたちはすべての文字種が正方形に近く設計されているものを見ており、それを何ら不思議とは思いませんが、毛筆手書きが普通の時代ではそれぞれの文字種はその文字固有の大きさと幅で書かれており、むしろ正方形の中に同じ大きさに見えるように書かれることはありません。活字（金属活字であれ、写植であれ、デジタルであれ、こう総称していいと思います）はさまざまに変化する字形を単一・固定化することで、没個性を生み出しますが、見出し用の大型活字とくに仮名書体はそのような制作のプロセスを歩みながら、その枠をこえてきわめて個性的な姿形を見せています。この築地活版の初号仮名は一つの典型で、定型化をめざしながら充分に個性的であることが、使い勝手を良くしているのではないのでしょうか。

岩田母型製造所の創業者である岩田百蔵さん（故人になられました）はこの初号仮名について、昔は新聞や書籍では黙っていてもこの仮名を使ったもので、細いのが必要ときはわざわざ

下左：青山進行堂『活版略見本』明治後期

徳富蘇峰が『国民新聞』を発行するに際して、それに必要な活字の供給を目的として作られた民友社鑄造部を、そこで働いていた渡辺宗七がのちに譲り受け民友社活字製造所を設立し、この初号明朝体仮名を販売しておりました。モリサワも写研もこの民友社活字製造所から原字の提供を受けたため、「民友」という名称が入っているのだと思いますが、民友社が独自で開発したものではありません。そして築地活版の初号明朝体仮名は民友社だけが独占的に販売していたのではなく、他の活字製造所も販売していました。

もう一つの代表的初号活字は秀英舎が明治三十年代に開発した

いゝろはに
ぬるをわ
つねなら

いゝろはに
ぬるをわ
つねなら

いゝろはに
ほへどち
イロハニ

もので、その仮名は毛筆手書きそのものに近い印象を与えます。築地活版のそれにくらべ、正方形への定着化は稀薄で伝統的な文字固有の大きさを維持しているようです。その結果今まで作られた数多くの仮名書体の中でもひとときわ個性的です。むしろ俗っぽいと思われるかもしれませんが、グラフィックデザイナーの杉浦康平さんは雑誌『銀花』の表紙をこの初号活字の清刷りを使って構成し、そのとびきり個性的な書体を人びとに印象づけました。現在の写研の「秀英明朝（S H M）」は秀英舎初号明朝活字を慎重に復元したものです。

設計方針

現在大量のデジタルフォントが流通していますが、特太のウェイトを持つ明朝体でとびきり個性的でかつ伝統の上に立つ本格的な書体がなく、編集者やデザイナーのかたがたはその出現を待ちのぞんでいると思われます。本来なら漢字を含めたすべてのキャラクター（JIS第一、第二水準）を準備できれば何の問題もありませんが、制作にかかる時間と費用の問題でむずかしい。そこで現在の日本語文章で五〇％をはるかにこえる仮名と若干の記号・約物類を準備し、提供することにいたしました。人びとの、書体への認知度は漢字では低く、仮名からの印象が強い。言葉をかえればかな書体をかえることで、組まれた文章の印象はがらりと変わります。写植書体やデジタルフォントが数多く「かな書体」を準備しているのはこういう理由です。このような使いかたは今にはじまったことではなく、A社の漢字にB社の仮名をあわせることは金属活字の時代からおこなわれていました。しかしこの安易というか、調和ということを見捨てたやりかたは組版の品質を下げるだけでけっして褒められたことではありません。

「日本語の文字と組版を考える会」が提供する特太明朝体「もじくみ仮名」は、現在流通している特太のウェイトを持つデジタルフォントのなかから、次の二書体を組み合わせの主たる漢字書体として選定し、それに調和するように設計してあります。

一、イワタ特太明朝体（イワタエンジニアリング）

二、ヒラギノ明朝体W7（大日本スクリーン製造）

「イワタ特太明朝体」は、大正九年岩田百蔵さんが創業した活字・母型製作に長い歴史と伝統を持つ岩田母型製造所の書体です。もともとは金属活字用の特太書体として、原字は四インチ（二〇・六ミリ正方）のサイズで設計されたものだと思いますが、イワタエンジニアリングがデジタル化にあたってどの程度の改変を加えたかは残念ながらわかりません。アナログ原字からデジタル化する場合、アナログ原字の完全な再現は不可能で、両者は別物と考えたほうが良いのかもしれませんが。しかしながら正確に二インチ（五〇・八ミリ正方、一四四ポイント）で出力したのを見えますと、本来持っていただろうと思われる鋭い線質は若干失われているようですが、それを差し引いても字形の構成は優れており、金属活字時代の書体設計の伝統を感じます。

「ヒラギノ明朝体W7」は字游工房が設計したヒラギノ明朝体ファミリーの一つです。W8がもっとも太く、W7はそれにすぐウェイトで「イワタ特太明朝体」とほぼ同じ太さを持っています。

ヒラギノ明朝体は最初からデジタルフォント用として設計がなされたもので、またMacOS以降のバンドル書体として今後使用頻度が飛躍的に高まることが予想されるほかに、その設計方針がヴィジュアル雑誌やパンフレットに使えるもので、明るくシャープな印象を与えるという、まことに明確な目的を持って設計されていることは、「日本語の文字と組版を考える会」が提供するこのもじくみ仮名を使って下さる編集者やデザイナーのかたがたにとって、組み合わせる漢字書体としてこの書

体を指定したのは適切な選択であり、またヒラギノ明朝体にとっても組版の幅が拡がることになるのではないかと思うのです。

一方は伝統的な金属活字書体、もう一方は最新のデジタル書体、この二つの優れた書体に調和する仮名書体と記号・約物類を制作するというのが、このもじくみ仮名書体に与えられた設計目標になりました。

設計細目

一、基準ワクの設定

ここでいう基準ワクとは、この特明朝体仮名のレターフェイスを設計する際の基本的枠組みをさしています。基準ワクは漢字と仮名では異なりますので、それぞれ別に設定しなければなりません。この仮名を組み合わせる二つの書体の漢字の基準ワクを二インチ一四四ポイントで出力したもので測ってみますと、両者ともにボディサイズ（仮想ボディでこれを100%とする）の約九四%であることがわかりました。通常の見出し用特太書体の漢字のレターフェイスは最大でも九五%をこえることはありません。

ただ今回この特明朝体仮名のもとになった東京築地活版製造所の初号明朝体は、活字の原型を使われる原寸サイズで凸刻したものの（種字といえます）を使っています。この原寸種字時代

野ノ春ノ櫻ガリ紅葉
山の秋の暮一夜を明

東京築地活版製造所『活版見本』明治36年11月1日発行

（昭和二十年代中頃まで続きました）には基準ワクという概念はありませんし、また原寸サイズで彫刻しますので、どうしてもレターフェイスは大きくならざるを得ません。これは漢字・仮名両方にいえることです。基準ワクという概念が導入されたのは、活字の原型が原寸彫刻ではなく、拡大原図の作図にかわった昭和二十年代中頃以降のことです。

築地活版の初号明朝体仮名のボディサイズをそのまま仮想ボディと同じサイズに拡大してしまうと、仮名とくに平仮名の多くはレターフェイスが仮想ボディいっぱいになってしまいます。つまり平仮名の基準ワクが100%に近くなるのです。これでは組み合わせる二つの漢字書体よりもはるかに大きく、ただでさえ大きく見える平仮名ばかりが目につき、漢字と仮名の大小のバランスが崩れ使いづらいものになります。

想定されたもじくみ仮名の使用領域は、書籍・雑誌等のタイトルや大きいサイズの見出し、広告であればヘッドラインというのが一般的であろうと思います。そうすると仮名とくに平仮名のレターフェイスは漢字とのバランスを崩さないぎりぎりの大きさに設定しておくほうが使いやすいことになります。

では片仮名はどうか。元来片仮名はとても小さく作られています。現在見るような大きな片仮名は写植書体以降のことではないでしょうか。片仮名の使用頻度が極端に増加し、その役割が大きく変わったこと、写植が広告をはじめヴィジュアル雑誌などの組版に使われた結果だと思っています。

築地活版の初号明朝体片仮名もとても小さく、ボディサイズを仮想ボディのサイズに拡大したとしても、平仮名との大きさに差がありこのままでは使えません。

そこで平仮名はすこし縮小し、片仮名は拡大することになりました。このもじくみ仮名は見出し用ですので、仮想ボディの九四%のレターフェイスを持つ漢字にたいして、仮想ボディの九〇%を仮名の基準ワクと設定し、築地活版の初号明朝体の平仮名を九五%に縮小し、片仮名は一〇八%に拡大して九〇%の

基準ワクの中に収めてあります。この結果両仮名の大きさの差は縮まり使い勝手がよくなったのではないかと思います。

もっとも、すべての仮名が九〇%の基準ワクに接するわけではなく、字種によってはそれよりも小さくつくられていますので、漢字の基準ワクと違い仮名の基準ワクは大まかな大きさの目安といったほうがよいかもしれません。

漢字の基準ワク——仮想ボディの九四%

仮名の基準ワク——仮想ボディの九〇%

平仮名は縮小し、片仮名は拡大しましたが、わずかの字種を除いて築地活版初号仮名が持っている姿形やフトコロは変更してはおりませんので、毛筆手書きが充分残っていた時代の香りは失っていないはずです。

二、ウエイトの設定

このもじくみ仮名書体との組み合わせを考えている二つの漢字書体——イワタ特太明朝体とヒラギノ明朝体W7——のウエイトを粗画から繁画までのいくつかの文字で調べてみますと、その線幅は仮想ボディに対して最大一三・八%、最小一〇%の範囲に分布し、一二・五%が平均的線幅になるようです。

横線・縦線の太さがはっきりわかる漢字にたいして、すべてが曲線で構成されている仮名の線幅をどこでとらえるか、むずかしいのですが、おのおの字種の構造上もっとも重要なところで、ほぼ直線に近いところと曲線部分のもっとも太いところが仮名の太さを感じる部分かもしれません。

欧文書体ならステム（縦線）の太さにたいしてたとえばOの上下中央のもっとも太いところは、それよりも太く設定しなければ同じ太さに見えませんか。和文書体も同様で、漢字と仮名が同じ太さに見えるには、仮名のほうを若干太く作ってやらなければなりません。これが一般的な作り方ですが、しかしこのもじくみ仮名書体を作るにあたって、普通とは逆に漢字にたいして仮名のウエイトを少し細めに設定することにしました。特に片

仮名は細くしてあります。ですから太さの順で言えば漢字↓平仮名↓片仮名となります。

図版で見ていただくと仮名のウエイトの差がよくわかると思います。ヒラギノ明朝体W7の仮名は一般的なウエイトの設定、つまり漢字と仮名が同じ太さに見えるように作ってあります。それに対してイワタ特太明朝体は漢字の太さより若干細めです。今回提供するこのもじくみ仮名は漢字よりもすこし細く設定し、漢字と組み合わせるとき、他の大見出し用特太書体のように仮名の中に漢字が埋没してしまうことを避けています。組んでみると漢字がまず目につくのがわかると思います。

片仮名はヒラギノ明朝体W7やイワタ特太明朝体とくらべてみ

十書東国永黄糧襲髓闘

十書東国永黄糧襲髓闘

あかなねほむやりれん

あかなねほむやりれん

あかなねほむやりれん

イウエサタネヒホミロ

イウエサタネヒホミロ

イウエサタネヒホミロ

もじくみ仮名書体

ヒラギノ明朝体W7

イワタ特太明朝体

もじくみ仮名書体

ヒラギノ明朝体W7

イワタ特太明朝体

ヒラギノ明朝体W7

イワタ特太明朝体

るとはるかに細く、特に横画の細さが目立つと思います。ヒラギノもイワタも細太の差がありませんが、この特太明朝体用もじくみ仮名は横画を思いきって細く作ってあります。平仮名も脈絡などの細くなるところはヒラギノやイワタより細くしてありますので、その結果平仮名片仮名ともに細太の差が大きく、漢字の構成に近づき組版全体が明るい印象を与えることになるはずです。

三、拗促音等の小字

日本語文章に拗促音等の小字について明記がなされたのは昭和二一（一九四六）年一月一六日の内閣告示第33号「現代かなづかい」が最初だと思います。これは現代国語の口語文を書きあらわすかなづかいの原則を示したもので、その細則の第21以降第33までにわたって小字の使い方を示しています。最後の備考の第9に拗音をあらわすには、や、ゆ、よを用い、第10に促音をあらわすには、っを用い、いずれも「なるべく右下に小さく書く」とあり、すこし右に寄せて小さく書くように指示しています。ですから拗促音等の小字が日本語文章の中に定着したしたのは、たかだか半世紀ほど前のことなのです。

「なるべく小さく書く」と指示されても、印刷・表示用の書体を設計するときの程度の大きさにしたら良いかは書いておりません。もっとも政府が大きさを決めたら気持ち悪いのですが……。市販されている書体のいくつかを見ると、拗促音小字は普通の仮名の八〇％から七〇％程度の大きさに、七八％ぐらいが平均的な大きさのようです。この値だと文章に組まれたとき普通の仮名との差があまりなく、拗促音小字の存在感というか役割が明確ではないように思います。かつて拗促音小字を書体セットの中に持っていないときは、使用サイズの二分の一を組み込んだのではないのでしょうか。拗促音小字が大きくなった原因として、一つには横組の増加、もう一つは写植書体を使う業種の隆盛——広告やヴィジュアル雑誌ですが——によ

ると思われます。そして書体制作にそれら業種にたずさわるデザイナーが参画しだしたことが拗促音小字の拡大に拍車をかけたと思うのですが、いかがでしょうか。

今回提供するもじくみ仮名書体の拗促音小字は、通常の仮名の六〇％の大きさに設定してあります。大きすぎずそして小さすぎず、できるだけ分をわきまえた上品さを感じさせる拗促音小字でありたいと考えて設定したものです。

四、その他の記号・約物類

このもじくみ仮名書体にはいくつかの記号・約物類が用意されています。他書体の記号・約物を混植した場合この書体の持つ雰囲気がそこなわれるものについてのみ用意してあります。それはまたこの書体を使うかたがたにとって、使い勝手が良くなると考えられるものでもあります。

記号・約物類のうち句読点、長音記号（音引き）、ダーク、リーダー、各種括弧については横組用と縦組用が用意してあります。

読点（、）は縦組用と横組用では角度をほんのわずかに変えています。縦組用はやや寝ており、横組用はやや立ち気味にして視線を止めるように作ってあります。

カンマ（、）ピリオド（・）については横組の日本語文章に合うようにドット（円の部分）を大きく作ってあります。カンマ、ピリオドは欧文書体に従属するもので、欧文用につくられたものをそのまま使っているのは、日本語の文書の中では役割を果たさないようです。このセットに含まれるカンマ、ピリオドの場合、ピリオドのドットはカンマのドットより大きく設定し、視線を確実にそこで止めることができるようにしてあります。

長音記号（ー）は現行他書体よりも短く作ってあります。特太のウェイトを持つ書体は大きく使う見出し用ですから長音記号の使用頻度は高いのですが、現行他書体の長音記号は長すぎてタイトルなどに使うには不適切です。この書体は使用時に詰め

組されることを前提として、その場合に長音記号が他の字種の中で違和感なく見えるように配慮してあります。

二の字点「ゝ」の位置は仮想ボディの中央でもいいのですが、この書体では中央よりすこし右に寄せて作ってあります。これもくの字点「ㄣ」と同様に縦組専用で、横組での使用はありません。使用頻度は高くないと思いますが、仮名または漢字に準じるものとして他書体では調和がむずかしい「々」(同の字点)「ㄱ」(しめ)「ㄴ」(こと)「ㄷ」(より)を用意してあります。

白ビュレット「。」、ビュレット「・」、白ゴマ「。」、ゴマ「、」の四種はルビのように字のわきにつけて語句を強調する記号である圏点です。句読点や中黒よりはるかに大きく作ってありますので間違うことはないと思いますが、使用にあたっては注意が必要です。

〔井〕〔井〕はこの書体の元となった東京築地活版製造所初号仮名に入っているものですが、JIS規格では〔井〕となっておりますのでこの書体用に〔井〕〔井〕を新しく作り、本来の〔井〕〔井〕をこちらに入れてあります。よろしく使い分けてください。

日本語の文字と組版を考える会が提供するもじくみ仮名書体についての書体解説と設計方針を記しました。この書体が皆様の組版やデザインを美しく、そして豊かにするものであることを願っています。

ご使用になる前に

配布のフォントプログラムは次頁に書かれていますように、完全な検証をして、その動作を保証しているものではありません。各々のコンピュータ環境によっては必ずしも同様の結果が得られるとは限らず、たとえ役に立たないことがあっても許してください。当該フォントを利用の際は、不具合の発生する可能性をふまえ、自己の管理責任においてご使用下さい。また、公開データ・文書の著作権はそれぞれの著者が保有しています。

右の注意事項について、ご承認をいただけましたら、当該公開データを複写・配布し、また、フォントデータを自由に編集・加工することは奨励します。一切の制限を付すものではありません。一次配布はオリジナルの公開データを原則とし、必ず記載のコンテンツを同梱してください。

さらに言えば、その際に生成された二次著作物についても実際の作業手順や結果としての製作物を再び一般に開示していただき、広く成果を共有することを望むものです。

次頁以降に配布フォントについての情報を記してあります。実際にお使いになる前にご一読されるようおすすめします。

ご不明の点はごさいましようが、後出の参考文献などご参照いただければ有益な情報が得られることでしょう。こと技術解説となると、より詳しいことをご存じの方々がいらっしやると思います。コメントや批判など、ご意見・ご感想のフィードバックを常に歓迎します。

連絡先には<moji@por.co.jp>を使ってください。

最後になりますが、小宮山氏、下里氏、会を支えてくださったみなさま一人ひとりに敬意を表し感謝の言葉にかえさせていただきます。

高野幸子

◎ソフト名・もじくみ仮名・ver. 2.0

◎配布・日本語の文字と組版を考える会

◎免責事項・当プログラムの性質上・いかなる理由において生じる損害に関わらず・供給者は一切の責任・義務を負いません。本プログラムの使用もしくは機能から生じる全ての危険は使用者が負担しなければなりません。

◎配布条件・オリジナルデータ・文書を添付の上配布のこと

◎フォルダの中身

文書は各フォーマット共通です。

Reaference(PDF)

●Macintosh版

MJKanaAppGai/MJKanaGaiH/MJKanaGaiV/MJKanaHiraH/MJKanaHiraV/MJKanaKataH/MJKanaKataV/MJKanaKigoH/MJKanaKigoV/MOJかな-ExBold

●Windows版

MJKANAAPG.TTF/MJKANAGAIH.TTF/MJKANAGAIV.TTF/MJKANAHIRH.TTF/MJKANAHIRV.TTF/MJKANAKAH.TTF/MJKANAKAV.TTF/MJKANAKIH.TTF/MJKANAKIV.TTF/MOJKUMIK.TTF

◎製作者名

書体設計：小宮山博史

ハンドディジタル：下里晃弘

ディジタルフォーマット：高野幸子

◎仕様・TrueType

◎インストール方法

Macintoshはシステムフォルダのフォントフォルダにドラッグアンドドロップして再起動後にお使いください。Windows環境では「設定/コントロールパネル/フォント」でファイルメニューから「新しいフォントのインストール」を選択してインストールしてください。

◎フォント製作環境

PowerMac7500 : OS8.1, G3 : OS9.1

◎フォント作成ソフト

漢字エディットキット, Fontographer4.01

FontLab Composer1.3.3

◎当該ドキュメント制作アプリケーション

QuarkXPress4.1J, Illustrator8.0J,

Acrobat5.0J, AdobePS8.7.2

参考文献または技術文書

『書体のディジタル・フォーマット』 Peter Karow・URW verlag

『新フォント関連用語集』 文字フォント開発・普及センター・日本規格協会

『日本語情報処理』 Ken Lunde・ソフトバンク

『日本語TEXテクニカルブックI』 アスキー

『日本のタイポグラフィ＝活字・写植の技術と理論＝』 佐藤敬之輔・紀伊国屋書店

『パソコンにおける日本語処理／文字コードハンドブック』 川俣晶・技術評論社

『ヘルマン・ツァップのデザイン哲学』 Herman Zapf・朗文堂

『CTP印刷システムに関する調査研究報告書』 日本印刷産業連合会

『Digital Formats for Typefaces』 Peter Karow・URW Verlag

『Fontographerユーザーズガイド』 Macromedia

『Ghostscript Another Manual』 江口庄英・ソフトバンク

『JIS X 4161(ISO/IEC 9541-1)フォント情報交換 第1部 体系』

『JIS X 4162(ISO/IEC 9541-2)フォント情報交換 第2部 交換様式』

『JIS X 4163(ISO/IEC 9541-3)フォント情報交換 第3部 グリフ形状表現』

『METAFONTブック』 Donald E. Knuth・アスキー

『PostScript詳細解説』 共著・CQ出版社

『PostScriptリファレンス・マニュアル』 Adobe Systems・アスキー

『PostScriptチュートリアル&クックブック』 Adobe Systems・アスキー

『PostScriptプログラム・デザイン』 Adobe Systems・アスキー

『Technical Note #5078 Adobe-Japan1-4 Character Collection for CID-Keyed Fonts』

『Technical Note #5012 The Type 42 Font Format Specification』

『Technical Note #5014 Adobe CMap and CIDFont Files Specification』

『Technical Note #5015 Type 1 Font Format Supplement』

『Technical Note #5088 Font Naming Issues』

『Technical Note #5092 CID-Keyed Font Technology Overview』

『Technical Note #5099 Building CMap Files for CID-Keyed Fonts』

『Technical Note #5180 CID-Keyed Font File Format for the Macintosh』 以上・Adobe Systems

『Windows 2000 Professional Bible』 インプレス